

1 背景・目的

あゆみでは、利用児が地域の保育園の活動に参加する「交流保育」を長年実施してきた。

この取り組みは、健常児との関わりを通じた社会性の発達、地域の中での人間関係づくり、子どもを地域の一員として育てることを目的とした先駆的な実践である。

一方、限られた回数の中で、子どもが集団に戸惑うことや、見通しの持ちにくさによる行動面の課題、保育園児が関わり方に迷うといった課題が、あゆみ・保育園双方で共有されていた。こうした課題を踏まえ、日常生活の中での継続的な交流を目的に、新たな交流保育の在り方を検討した。

本実践では、子どもを「あゆみの子」「保育園の子」と分けるのではなく「調布の子ども」と捉え、療育と保育が共に育ち合う「両育」という視点を大切にしながら交流保育を再構築することを目的とした。

あゆみ

テーマ

『療育(りょういく)から(から)両育(りょういく)へ』
～市内保育園との交流保育の実践～

2 取り組み内容や実践の結果

公立保育園2園の5歳児に、あゆみに遊びに来てもらう形で交流保育を実施した。

富士見保育園では5歳児18名を3グループに分け、各グループ3回実施。上石原保育園では5歳児20名が月1回、計3回の交流を行い、うち1回は行事にも参加した。活動は、

- ①見通しの持てる活動
- ②いつも過ごしている場所
- ③顔見知りの人がいる

という3つの「安心感」を重視し、子ども同士の関わりハードルを下げる工夫を行った。



4 考察/今後に向けて

本実践から、交流において「人」も含めた環境全体が重要であること、集団でも一人ひとりに応じた支援が必要でありユニバーサルデザインの視点を日常に取り入れる意義が再確認された。

共生社会の実現には一人ひとりの意識と行動が不可欠である。療育と保育が分かれて存在するのではなく、共に子どもを育てていく「両育」という考え方は、インクルーシブ保育の推進において有効である。

今後も、市や関係機関と連携しながら、地域全体で子どもを育て、障害の有無に関わらず、誰もが地域で自分らしく暮らせる社会を目指し、法人を越えた仲間づくりを進めながら、「両育」の実践を広げていきたい。

3 実践の考察/結論

交流を重ねる中で、子ども同士の距離感や関わり方に変化が見られ、無理のない形での相互作用が増加した。あゆみ職員・保育園職員双方においても、子どもへの関わり方や活動設定に対する意識の変化が確認された。特に、誰もが参加しやすい活動づくりや、個別の支援と集団活動の両立について共通理解が深まった。

